

不知火とポンカンの早期1回摘果による 高品質果実安定生産技術

不知火やポンカンは兩年でも糖度がある程度高い反面、乾燥年には減酸が遅くなり、また樹勢が低下しやすく、着花も不安定になるなど、栽培上の問題が多い。

摘果は慣行的に粗摘果と仕上げ摘果に分けて行われているが、これらの品種に対して果実の肥大促進と減酸及び安定生産をねらいとして、早期に1回摘果の効果を検討した。

不知火については、摘果が7月下旬以降に遅れると、10a当たり1t以上の炭水化物が無駄に消費されることが試算される。6月下旬に1回で摘果すると、その消費量が著しく少なく、これに代って7月には細根の生育が、8月には充実した夏枝の発生が促進され、樹

勢が良くなる(表1)。また果実肥大もすぐれて、クエン酸は0.2%以上低下する(表2)。さらに早期摘果で葉果比100程度にすると、翌年の着花も良好となり、隔年結果性が軽減できる(表3)。なお、摘果を行う時に、弱小枝や立ち枝を除去すると、夏枝の発生がさらに促進される。

このような技術はポンカンにも適用され、太田ポンカンでは6月下旬、今津ポンカンでは7月下旬に葉果比80程度に1回摘果すると、果実肥大が促進され、収量が増加する。またクエン酸が低下し、糖酸比が高まるなど、品質向上効果がある。(表4)。

(南予分場長 高木信雄)

表1 不知火の早期1回摘果が枝梢の生育に及ぼす影響(平成9年)

試験区	新梢数/樹			新梢長(cm)			葉数/樹			葉面積(cm ²)			細根量(g)
	春枝	夏枝	秋枝	春枝	夏枝	秋枝	春葉	夏葉	秋葉	春枝	夏枝	秋枝	
早期1回摘果	41.3	62.7	22.0	6.5	14.3	14.0	202	546	174	9.4	22.4	10.6	276.4(514)
慣行摘果	34.7	24.6	39.3	6.3	20.4	14.1	194	303	358	9.9	22.4	9.4	53.8(100)
後期摘果	39.0	29.0	18.0	7.6	14.6	9.4	246	287	110	8.2	18.3	13.2	69.3(129)

表2 不知火の早期1回摘果が収量、品質に及ぼす影響(平成9年)

試験区	収量(Kg)	1果重(g)	果肉歩合(%)	果汁歩合(%)	糖度(Brix)	クエン酸(g/100ml)
早期1回摘果	3.42	350	74.8	47.6	13.7	1.19
慣行摘果	4.87	299	71.9	46.8	13.8	1.50
後期摘果	4.45	254	72.1	44.0	14.0	1.48

注) 12月26日採取、分析。

表3 不知火の早期1回摘果における葉果比が収量、生育及び次年の着花に及ぼす影響(平成8年)

葉果比	果数	収量(Kg)	果重(g)	階級割合(%)					細根量	細根活力	着花数
				3L	2L	L	M	※1			
慣行摘果											
90	86	21.8	254	38	49	10	3	2.0	1.0	20	
103	62	16.2	264	46	45	9	0	1.0	1.0	69	
早期1回摘果											
90	56	15.6	273	62	27	8	2	3.0	2.0	138	
112	55	15.1	277	67	30	2	1	5.0	3.0	119	
131	45	12.0	270	43	54	3	0	4.0	3.5	149	

注) ※1:細根量:5多←3中→1少、

※2:細根活力(色調、充実度の遠視調査):5高←3中→1低。

表4 早期1回摘果が今津ポンカンの果実肥大と減酸に及ぼす効果(平成10年)

試験区	横径(cm)	1果重(g)	果肉歩合(%)	糖度(Brix)	クエン酸(g/100ml)	糖酸比	収量(kg/樹)
7月上旬	7.23	161.0	71.4	13.8	0.769	17.3	31.2
7月下旬	7.21	156.2	70.9	12.8	0.785	16.3	28.7
8月中旬	7.19	156.2	70.7	13.1	0.918	14.3	27.1
9月上旬	6.88	139.4	71.9	13.0	0.825	15.8	24.3

注) 平成10年1月20日分析。